

かつてカルタゴという繁栄した国家が存在していた。伝説によれば、王位にあった父親を暗殺されたフエニキアの女王エリッサが亡命し、アフリカ大陸の北岸、現在のチュニジアの周辺に到達して建国したとされている。その建国は紀元前九世紀と曖昧に推測されているが、滅亡したのは紀元前一四六年と明確に特定されている。

カルタゴはローマとポエニ戦争といわれる三回の戦争を経験し、三回とも敗戦という結果になり、最後の敗戦で滅亡する。しかし、第二回目はカルタゴの名将ハンニバルが有名なアルプスの山越えをしてイタリア半島に進攻し、トラシメヌス湖畔の戦闘、カンネーの戦闘などでローマの大軍に圧勝する。だが残念なことに、本国から遠方のため補給が十分ではなく、五年の戦闘の最後にはアフリカまで後退し、結局は敗戦ということになる。

カルタゴが滅亡する第三回目のポエニ戦争は紀元前一四九年から四年にわたる戦争であったが、ローマの執拗な攻撃により、紀元前一四六年春に最後の要塞も陥落し、現在では遺跡さえも明確ではないほど、建物も書物も人間も殲滅されてしまった。このカルタゴの運命を現在の日本の反面教師とすべきという意見は、すでに二〇年近く以前に、森本哲郎『ある通商国家の興亡』で指摘されているが、ここで再考してみたい。

日本が反面教師としなければならない第一の要点は経済至上主義である。カルタゴは農業大国であると同時に貿易大国であり、地中海沿いの各地に多数の植民都市を建設するほど繁栄していた。その経済の実力が遺憾なく発揮されたのが敗戦による賠償の返済である。第二回目の敗戦で、ローマから巨額の賠償を五〇年賦で要求されたが、わずか一〇年後には、前払いで一括返済したいと交渉するほど経済を繁栄させることに成功している。

しかし、問題は経済の裏側にあった。前述の書籍に以下のような史家の言葉が紹介されている。「カルタゴの歴史は文明の浅薄さと脆弱さを明示している。それはカルタゴ国民が財力の獲得だけに血道をあげ、政治、文化、倫理などの進歩を目指す努力をしなかったことである」。そして著者も最後に、カルタゴの悲劇は経済活動にあったのではなく、それ以外の何物をも追求しなかったことにあると警告している。

もう一点、カルタゴ滅亡の原因が指摘されている。カルタゴの全盛時代にローマで活躍したカトールという大政治家がいた。この大物は高齢にもかかわらずカルタゴへの視察団長として現地を訪問し、その繁栄を自国への脅威とし、以後、議会で演説することに、演説の内容と関係なく、最後は「デレンダ・エスト・カルタゴ（カルタゴを殲滅するべし）」と強調した。それが次第にローマ市民に浸透していったのである。

ここで説明するまでもないが、現在の日本の状況に酷似していることは明瞭である。第一の敗戦以後も、第二の敗戦といわれるバブル経済の崩壊以後も、日本は驚異の再興をしてきたが、それは経済の再興だけであり、政治の腐敗、倫理の喪失、そして文化の崩壊は反対に拡大してきた。テレビジョン番組で芸人がニュース解説をする世界唯一の珍奇な国家になっていることに国民は気付かず、低俗な娯楽晩気味に時間を浪費している。

そして隣国の中国や韓国からは執拗に日本を攻撃する発言がなされているが、満足に反撃もできないまま放置している。これが国内においても国際社会においても、ボデイブローのような効果をもたらすことは明瞭である。四〇万人といわれるカルタゴの国民の生命を犠牲にした遺書を、我々は再考すべき時期にある。